

國學院大學學術情報リポジトリ

〔談話室〕 サイバー空間：國學院!?

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 井上, 明芳, Inoue, Akiyoshi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000384

サイバー空間 國學院!?

井上明芳

最近思うことがある。なぜ教室は四角くて、隣接する教室と隔てられているのだろうか。不思議に思いませんか。確かに、教室では専門的な学びが行われており、隣接する教室とは目的が異なっている。だから隔たるのは当然だと言うのであれば、教室一個の知見の専門性が隔たる理由の一因になりかねない。専門的な学びは、隔たり閉じるのではなく、開かれる必要があるだろう。

かつてプロジェクターの使用が真新しかった頃なら、教室の四角い状態を不思議には思わなかっただろう。隣りの教室では他の言葉が使用されており、関係があるとかないとか考えなかった。しかし、現在スマートフォンなどで、先生の目を盗んで教室外とつながることが可能な状態にある。それをむろん、単純によしとするわけではないけれども、今教室で展開されている知見やイメージ、それらを作り上げている言葉について、ふと疑問に思ったら、さっと検索できるのは、教室外とのつながりにある。これは知の巨人たろうとする巨大検索システムの枠組みに転じるだけなのだが、それでも教室の壁を越えることにはなる。自分が触れている教室内の知見を、教室外のそれに今、ここでつなぐ。しかも教室という空間には、からだごと臨んでいるのだから、知を教室内・外で身体的に体験することになる。

そんなことを思うと、デジタル技術の特質である双方向性と即時性を活かしたシステムを構築して、國學院大學という敷地全体を一つのサイバー空間にしてみえないかと空想する。イメージはSNSとデータ・ベースのリリースである。

ある教室で展開される学びの言葉は、理解と疑問に満ちるであろう。そのとき、教室内部での解決に留まらず、教室外

とのつながりがあれば、知的領域を広げることになる。今こんな言葉で展開されている知見がありますというつぶやきが放たれる。即座に図書館データ・ベースが連動し、こういう関連書物がありますという提案をしてくる。あるいは学内の休講揭示モニターにつぶやきが流れれば、興味ある者が反応を返す。発表準備をしている集まりは、流れるつぶやきにヒントや気づきを得たり問いを投げかけたりすることもあろう。これによって教室の外にいる者も授業に参加することになると言えば言い過ぎかもしれないが、少なくとも知的領域へつながるのは確かであり、教室の壁がなくなり、内と外の隔たりはなくなる。

教室の内と外がつながり開かれる。教室内に思いがけない言葉が流れ込み、リアルタイムに検討や思索がはじまる。こうした一連の動きは、知を相対化する。いま・この学びの相対化につながれば、自らの学びについて自覚的に成り得るのではないだろうか。

学内で行われている学びの様々が相互に相対化し、つながると思わなかったジャンルがつながったりその逆もあったりと学問の領域の遠近が見えて来る。これを視覚化すれば、教室と教室とがつながったり離れたりしながら、大学全体の知の特徴が見えてくる。さらにデータを累積していけば、大学の知のビッグ・データとなるであろう。大学の学的伝統が可視化される。同時に一つ一つの学びがビッグ・データの中で位置づけられ、学びの相対化とともに、自分の得た知見の方向性も把握ができるようになるであろう。

デジタル技術を大学教育にどのように活かせるのかという課題は、教員、学生、黒板、教科書、ノートというアナログな連続性からデジタルの有する離散性へと発想を転換させているのではないだろうか。デジタル技術が発揮する双方向性は当然として、むしろ即時性、リアルタイムの性質をどう活かすのか。見たこともない、やったこともない方法を発想してよい時機が到来している。デジタル技術が身近になった現在、Yes、No、キャンセルの選択ばかりになる前に、まずは教室の壁を越えてみたい。

(日本文学)